

芥川龍之介の〈マリア〉観

林, 薫植
慶南大学校

<https://doi.org/10.15017/15984>

出版情報 : Comparatio. 4, pp.45-67, 2000-03-30. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



芥川龍之介の〈マリア〉観

林 薫 植

I 序 言

芥川の「西方の人」のなかには、イエスの父母であるマリアと聖霊のことについて述べた文が載っている。聖書によると、イエスは聖霊によって身ごもったマリアから生まれた。

「西方の人」は、イエスのことをその誕生から始まって年代記的に記しているので、当然イエスの父母の話が最初に載っている。ということで、まず「西方の人」のなかにイエスの母マリアは、どういうふうに描かれているかを究めたいと思う。まず第一に、その全文を確認しておきたい。

2 マリア

マリアは唯の女人だった。が、或夜聖霊に感じて忽ちクリストを生み落した。我々はあらゆる女人の中に多少のマリアを感じるであらう。同時に又あらゆる男子の中にも——。いや、我々は炉に燃える火や畠の野菜や素焼きの瓶や巖畳に出来た腰かけの中にも多少のマリアを感じずるであらう。マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。クリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通つてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行つた。世間智と愚と美德とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。ニイチエの叛逆はクリストに対するよりもマリアに対する叛逆だった。

(吉田孝次郎 他『『西方の人』全注解』、清水弘文堂)

以上の本文から分かるように、芥川はマリアについて、キリスト教の本質的なイメージとは懸け離れた主張を弄していた。つまり、芥川はマリアについて、〈「永遠に女性なるもの」ではな〉く、〈唯の女人〉にすぎない、〈「永遠に守らんとするもの」である〉と言っているのである。要するに、一言でいえば芥川のマリアは、〈「永遠に守らんとするもの」〉なのである。

いったいこのような芥川の主張は何を意味するのか。これは結局、マリアのことをどういうふうに解すべきかに関わる問題であらう。と言う訳で、本稿においてはそのマリアのことを、聖書と比較しつつ注釈的に考察したいと思う。

II 聖書の中のマリア

イエスの母マリアは、神の子イエスを生んだという事実だけでも崇敬と注目の的になるのは言うまでもない。だとすれば、聖書はこのマリアをどのように描写しているのか。

マリア(マリヤ: Mary)は聖書によく登場する女性たちの名前で、ヘブライ語では「ミリアム」であるが、新約聖書のマリアはミリアムのギリシャ式発音である。モーセの姉ミリアム(Miriam)

(出エジプト 15 : 20) 以来、多くの女性の名として新約時代にも好んで用いられて、そのマリアの名をもつ女性が六人登場している。例えば、イエスの母マリアを始め、マグダラのマリア (ルカ 8 : 2、マタイ 27 : 56)、ヤコブとヨセフの母マリア (マルコ 15 : 40、47、16 : 1)、しかしこの女性はクロパの妻マリア (ヨハネ 19 : 25、マタイ 27 : 56) と同一視される。それからベタニヤのマリア (ルカ 10 : 38 以下、ヨハネ 11 : 1 以下)、ヨハネ・マルコの母マリア (行 12 : 12)、ローマの信徒マリア (ロマ 16 : 6)、などがそれである。が、その中でもよく取り上げられる人物は、言うまでもなくイエスの母マリアとマグダラのマリアの二人である。

しかしマリアといえば、何よりもまず神の子イエスの母、すなわち聖母マリアを指すのが一般的であるといえよう。聖書に現れているイエスの母マリアについては、「受胎告知」「処女懐胎」(マタイ 1 : 18 以下、ルカ 1 : 26 以下)、「マリヤの讃歌」(ルカ 1 : 46 以下)、「誕生」(同 2 : 1 以下) などにおける記事が著名である。

このマリアについて確かなのは、ガリラヤのナザレ出身であること (ルカ 1 : 26、2 : 39、マルコ 6 : 3、マタイ 2 : 23)、更にヨセフと結婚していたことである (ルカ 4 : 22、ヨハネ 1 : 45、6 : 42。なおルカ 3 : 23 参照) (注 1)。では、聖書に描かれているマリアの様子について調べてみよう。

[1] マリアの信心

まず第一に、マリアへの受胎告知のところである。

³⁸ マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」 こうして御使いは彼女から去って行った。

(ルカの福音書 1 : 38) (「聖書」新改訳、いのちのことば社、以下同じ)

上の引用文は、天使ガブリエルから神の子の処女降誕という神の計画を伝えられたマリアが、神の言葉への全面的信頼をする答えであるといえる。つまり、マリアは神から与えられた使命を謙虚な信仰で受け入れるのである。

このような神の計画を聞いたマリアは、喜んで主への賛歌を歌う。このマリアが聖霊に満たされて歌ったとは明記されていないが、<主によって語られたことは必ず実現すると信じきった> <幸いな>人として語るので (ルカ 1 : 45)、実質上マリアの歌も靈感による預言歌であるといえる。

⁴⁶ マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、⁴⁷ わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。⁴³ 主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。(ルカの福音書 1 : 46~48)

上のマリアの賛歌は、自分自身に対する神の恵みへの個人的感謝の歌であるが、これは神への信頼と従順によるマリアの心の現れであるに違いないと思う。

またイエスの誕生の直後、天使から救い主の降誕のことを聞かれて訪ねて来た羊飼いたちは、天使から告げられた話を知らせたが、この際のマリアの態度は次の如くであった。

¹⁶そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。¹⁷それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。¹⁸それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。¹⁹しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。(ルカの福音書 2 : 16~19) (下線引用者)

羊飼いの話を聴いた外の人とは違って、マリアは聖霊によって生まれた子に対する神のお告げを大事にする態度をとったのである。

新約聖書の四福音書の中でイエスの少年期に触れている唯一の記事は、ルカの福音書第 2 章に現れている神殿巡礼物語である。この記事の中には、少年イエスのことを心配する母親の姿が示されているが、この際のイエスに対するマリアの態度も、人並みはずれているものであったといえる。

⁵それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。(ルカの福音書 2 : 51) (下線引用者)

以上のような記事は、イエスの身の出来事を通して、神の子としてのイエスの神性にマリアが留意していたことを意味する。結局、これらの記事に見られるマリアの様子は、神を信頼し、神意に素直に従順する信心深い乙女のそれであったといえる。

さらにイエスの昇天後も、やはりマリアは信仰をもって弟子の団に参加しているが、このような記事もマリアの信心をうかがわせる場所であると思う (使徒行伝 1 : 14)。

[2] マリアの母性

ところで、イエスの宣教開始後の記事には、彼女について記されることは少ないといえる。つまり、カナの婚礼においてイエスに緊急の依頼をするマリア (ヨハネ 2 : 1~12)、カペナウムまでイエスを呼び戻しに来た母親としてのマリア (マルコ 3 : 31)、十字架上のイエスにより、自分の将来を弟子に委託される肉親のマリア (ヨハネ 19 : 25~27)、などの姿が描かれているが、これらにおいてのマリアは信仰的な姿ではなく、母と子としての人間的関係が描き出されていたといえる。

²⁰イエスが家に戻られると、また大ぜいの人が集まって来たので、みなは食事する暇もなかった。²¹イエスの身内の者たちが聞いて、イエスを連れ戻しに出て来た。「気が狂ったのだ。」と言う人たちがいたからである。(マルコ 3 : 20~21)

イエスの伝道活動はいよいよ最盛期に入り、民衆はガリラヤ周辺にととまらず、しだいに広い

地域からイエスのもとに集まって来る。そのイエスの活動範囲が広がるに伴って、イエスの名声も高まるようになる。しかしそれと同時に、イエスに対する誤解も生じてきたのである。

上の引用文は、〈気が狂った〉というイエスへの噂に関するマルコのみの記事であるが、このような誤解をする〈イエスの身内の者〉のなかには、イエスの母マリアも含まれていたのは言うまでもなからう。マリアと兄弟たちは、“興奮した空想家”（注2）とか、〈気が狂った〉といわれるこのイエスを〈連れ戻しに〉ナザレから〈出て来た〉が、この時のイエスの態度は、断固たるものであった（マルコ3：31～35）。

この時のイエスの言葉の意味は、キリストと信者たちとの霊的結び付き、すなわち神の霊的家族の結びつきは、肉親や親族のつながりよりも深いということである。つまり換言すれば、神への従順は家族への責任に優先するという意味なのである。このようなイエスの態度と、イエスを家族の一員と思っているマリアの態度とは、そもそも両立できないものであった。

要するに、以上にみられるようなマリアの様子は、自分自身の子のことを心配する世の中の平凡な母そのものであるに相違ないと思う。

結局、マリアはキリスト教史において“恵まれた方”（ルカ1：28）、あるいは“女の中の祝福された方”（ルカ1：42）として大事な役割を果たしたのであり、専ら神様に従順した信仰の女であったに違いない。しかし、いわゆるマリアの永遠の処女性、無原罪、昇天などによるマリアの神格化、すなわち“聖母崇拜”の教義はカトリック教会が主張することで、聖書に基づくものではないのである。

要するに、神の子の母としての神格化されて崇められるマリアの様子は、決して聖書の中には描かれていないのである。では、芥川の「西方の人」のなかのマリアはどういう様子であるか。

Ⅲ 〈マリア〉をめぐる先行研究史

芥川の「西方の人」の先行研究ではマリアをどういうふうにか考察してきたかについて述べてみたい。

まずは底本中の注釈であるが、この注釈はマリアについて、〈芥川は「永遠に守らんとするもの」と呼び地上の生活を意味させている〉といい、この「永遠に守らんとするもの」は〈革新に対して保守、浪漫主義に対して現実主義が想起される〉という。これは結局、〈聖霊に対して「永遠に超えんとするもの」と呼んでいるのと対照的である〉といっている（注3）。

では、以下においてはマリアに関する主な先行研究を調べてみよう。

まず第一に吉田精一の説であるが、氏は〈芥川はマリアを「唯の女人」とし、素焼きの瓶や、がんじょうにできた腰かけなどにも感じられる、「永遠に守らんとするもの」の象徴だとする〉といい、マリアは〈忍耐を重ねて、自己の利益を守り、現状を維持しようとする精神、事なかれ主義、ニーチェのいう家畜の道徳、奴隷の服従を意味するのだろう〉と述べている。結局、吉田のマリアは現状維持の生活者であるといえよう（注4）。

梶木剛はマリアについて、〈マリアとは、あらゆる“大衆的なもの”の象徴であることを意

味する。「永遠に守らんとするもの」とは“大衆的なるもの”とシノニムである>といている。梶木は、マリアとは結局、<大衆>の意味であると主張する（注5）。

高田瑞穂はマリアのことについて、<芥川の「永遠に超えんとするもの」が、「永遠に守らんとするもの」の対極に置かれていることにも多少ふれる必要があろう。しかし、「西方の人」第二章「マリア」に関する「永遠に守らんとするもの」には、それほどの飛躍的思惟はない。もともと、その実態が人間であるからである。ただ、芥川にとってマリアが「永遠に女性なるもの」であるに止まらず、「あらゆる男子の中にも」内在するものとして広げられている点に留意すればよいであろう>といているが、氏の場合は、マリアの性格についての明確な言及はしていない（注6）。

鈴木秀子は、<「西方の人」において、芥川はキリストを求めながらマリアから目をはなさない>といて、<芥川が、マリアをはっきり意識したのは、「日本の聖母の寺」においてではなかったであろうか>と主張する。また、<実母の発狂によって母の喪失を体験した芥川は、キリスト信者のうちに、今なお生きつづける「永遠の母」に鋭い興味をしめしたのではあるまいか>と云っている（注7）。

石割透は、<クリストの像を示すに、芥川は、一方の極に聖霊を据え、その対極にマリアを置くという二元論の中で展開させた>が、その実<芥川の生における本来の図式の中には、聖霊とマリアに対比される二元論など存在しなかった>、と断言している。特に石割は、芥川の故郷ともいえる地であった本所と、江戸以来の旧家である芥川家の近代での没落に対する芥川の視線を通して、「西方の人」を眺めようとするのである。つまり、<芥川におけるマリア的なるものは、そのまま、近代の中でひたすらに下降し、生を脅かし、死に向かって進行していくものだった>という。氏はマリアと聖霊について、<方向のみ異なる平行線上の同じ運動として存在していた筈だ>と結論づける（注8）。このような石割の説は、対極的・対立的に論じていた従来の「西方の人」論とは違う特異な主張であった。

その反面、笹淵友一は「西方の人」を<二極構造>の構図から把握していた。まずマリアについて笹淵は、<芥川の説明によれば、クリストの母マリアを象徴とする「永遠に守らんとするもの」は、あらゆる女人の中に、又あらゆる男子の中にも見出だされる、という一見極めて茫漠とした概念であるが、><「守らんとするもの」の「守る」という意味は保守、守旧というに近>いといつて、それを<「庶民性」或は「日常の瑣事」（『侏儒の言葉』）>であると主張する。そういう<「日常の瑣事」が『西方の人』の「永遠に守らんとするもの」と重なり合う概念であることは明らかだ>と述べている（注9）。

佐藤泰正はマリアについて、<「炉辺の幸福」が「マリア」の象徴する「守らんとするもの」につながることは明らかだ>といている（注10）。

以後佐藤は、<マリアを聖なる存在と見ず、忍苦の道を歩む母なるもの、女人の象徴と見>、<マリアを人間的側面から見つつ、ヨセフの存在をあえて切り棄てるところに、この作品の持つひとつの特性、限界がある>と述べている（注11）。

関口安義は、まず<芥川のキリスト論の中核は、このユニークなマリアと聖霊論にあるといつても過言ではあるまい>という前提を示し、「西方の人」には<マリアは、あくまで「守らんとするもの」である“母”のイメージで描かれる>が、このようなくマリアは「世間智と愚と美德」

の中にたたずむ“母”として一生を歩んだきわめて平凡な保守主義者だったと芥川はい>っていると説明する（注12）。

一方、笹淵友一は前の自分の説をより発展させて、「西方の人」の主題設定は<「永遠に守らんとするもの」としての、キリストの母マリアと、「永遠に超えんとするもの」としての、キリストの父聖霊との二極の視点から「西方の人」キリストの内部葛藤とその悲劇とを映し出そうとしている>ことにあると前提する。そしてマリアについて笹淵は、<芥川はキリストの母マリアを「永遠に女性なるもの」ではなく、「永遠に守らんとするもの」と定義した。言うまでもなく、カトリックの聖母観から「西方の人」のマリア像を解放し、要するに平凡で、保守的な女性像として捉えたのである>と述べている（注13）。宮坂覺は、<芥川は、キリストの悲劇をマリアと聖霊の子供、すなわち「永遠に守らんとするもの」と「永遠に超えんとするもの」との子供であるところに位置づける。ここで語られる「守らんとするもの」「超えんとするもの」は、本来、脈絡を持ち得ない<一元的なものである>ことを前提にする。氏は、<「超えんとするもの」が、相手を許さぬ一元的なものとなれば、「守らんとするもの」も、同様のことがいえる>と前提し、「守らんとするもの」は<「超えんとするもの」が意識される時、派生するものであり、それ自体は存在感を有し得ない。換言すれば、「超えんとするもの」が生じないかぎり、派生しようがないということである>という。だから、<その意味では「超えんとするもの」同様、「善悪の彼岸」にあるといつてよい。「超えんとするもの」が意識された時、その反照として「守らんとするもの」が意識される>と主張する（注14）。

三好行雄はまず、<「西方の人」は、キリストの母なるマリアに“永遠に守らんとするもの”をながめ、真の父聖霊に“永遠に超えんとするもの”をみる独自の論理からはじまっている>とした上で、マリアについては、<マリアは“世間智と愚と美德”のがわにたたずむ女性であり、“炉に燃える火や畠の野菜や素焼の瓶や巖畳に出来た腰かけ”や、つまりあの牧歌的な炉辺の幸福を“守らんとするもの”である>と言う。要するに三好は、<龍之介の描くマリアは“永遠に守らんとするもの”の象徴であり、炉辺の幸福の守護神である>と結論づける（注15）。

磯田光一は小川国夫との対談の中でマリアについて、<母のマリアのほうは、ごく普通の庶民の持っている感覚、つまり「永遠に守らんとするもの」という言葉の示しているように、いろんな庶民の持っている動かしがたいもの>であると述べている（注16）。

以上、「西方の人」のなかのマリアについて、その主な先行研究者の学説を調べてみた。その結果、だいたいの先行研究者は、対立構造の中で自分の説を展開していたことが分かる。勿論、これは「西方の人」のなかの芥川一流の表現に影響されたに違いないと思う。つまり、芥川は「西方の人」のなかでマリアと聖霊のことを、それぞれ<永遠に守らんとするもの>と<永遠に超えんとするもの>とに、対立的なものとして表現していたことは、既に先述した通りである。

このような対立的構造の上で論じている研究者は、<二極構造>と説明して論を展開している笹淵友一を始めとして、吉田精一、<対極>の立場から見ている高田瑞穂などである。また、底本の場合も<対照的>という言葉を用い、対立構造を見ていた。佐藤泰正の場合も、聖霊とマリアのことを<「永遠に超えんとするもの」と「永遠に守らんとするもの」との両者の葛藤>とし

てとらえているから、やはり対立構造の立場であると言える。特に吉田精一と笹淵友一の場合は、マリアについてそれぞれ「現状を維持しようとする精神、事なかれ主義」と「平凡で、保守的な女性像」といって、その象徴性を述べていた。

一方、対立構造のような二分法の考え方を認めない研究者もいる。特に石割透は、「クリストの像を示すに、芥川は「二元論の中で展開させた」が、その実「芥川の生における本来の図式の中には、聖霊とマリアに対比される二元論など存在しなかった」と断言して、芥川家の宿命と近代との関連のうえで独特な論を展開したうえで、マリアを「崩壊に向かってひたすらに下降する」ものであるといった。

また、宮坂覺は、芥川はキリストの悲劇を「永遠に守らんとするもの」と「永遠に超えんとするもの」との子供であるところに位置づけるが、実はこの「守らんとするもの」と「超えんとするもの」は、「本来、脈絡を持ち得ない」「一元的なものである」と主張して、やはり対立構造を認めない立場に立っていた。

その他の説としては、関口安義の場合は、マリアを「きわめて平凡な保守主義者」であると言う。三好行雄も、マリアについては「炉辺の幸福の守護神である」と言っている。磯田光一の場合は、マリアについて「いろんな庶民の持っている動かしがたいもの」という、漠然とした表現をしている。

しかし、梶木剛の説は以上の論者のものとは違っている。梶木は、「永遠に守らんとするもの」とは「大衆的なもの」とシノニムであるから、マリアとは結局、「大衆」を意味するといふ。この梶木の説は、先述の笹淵友一の説と共に示唆に富んでいるといえよう。

今までの先行研究者の説の中で注目に値するのは、「二極構造」の笹淵友一とその反対の立場の石割透、それから梶木剛という、三人の論者の説であると思う。しかし、この三人の研究者の論説も、やはり「西方の人」をめぐる究極のマリア論と聖霊論であるとは言えないと思う。以下、これらの論説とともに先行研究者の説を見直した上で、マリアというものの意味とその象徴性を、主に注釈的に考察することとする。

IV 「マリア」の本質

まずは、「マリア」という女人のことであるが、芥川は「西方の人」のなかでマリアのことを次の如く描写していた。

- 1、キリストの母。(2 マリア)
- 2、或る夜聖霊に感じてキリストを生み落とした唯の女人。(上に同じ)
- 3、あらゆる女人と男子の中にもマリアを感じる。(上に同じ)
- 4、炉の火・畠の野菜・素焼きの瓶・巖畳に出来た腰かけにも感じる。(上に同じ)
- 5、「永遠に女性なるもの」ではないマリア。(上に同じ)
- 6、「永遠に守らんとするもの」であるマリア。(上に同じ)
- 7、「涙の谷」の中に通っていた忍耐の一生。(上に同じ)

- 8、世間智と愚と美德のマリアの一生。(上に同じ)
- 9、ニーチェの反逆したマリア。(上に同じ)
- 10、キリストの父、大工のヨセフは実はマリア自身。(4 ヨセフ)
- 11、美しいマリアは醜聞の時から人間苦の途に上り出した。(6 羊飼ひたち)
- 12、キリストは彼自身に、――彼自身の中のマリヤに叛逆してゐる。(31 キリストよりもバラバを)

正編「西方の人」の中に描かれているマリアへの表現は、大体上の通りである。ついでに、「続西方の人」の中の描写も調べてみよう。

- 13、キリストが聖霊の子供であることを承知していた美しいマリア。(続 8 或時のマリア)
- 14、マリアはこの現世を忍耐して歩いて行った女人。(続 11 或町のキリスト)
- 15、キリストの母という以外に News Value のない女人。(上に同じ)

以上、「西方の人」のなかに描かれているマリアに関する芥川一流の表現を調べてみた。

次は、芥川におけるマリアの意味を把握するために、<2 マリア>の本文を綿密に調べてみたいと思う。

前に調べてみた通りに、芥川は第2章<マリア>の冒頭で、<マリアは唯の女人だつた>としたにもかかわらず、すぐ後では<あらゆる男子の中にも>マリアを感じるという。しかし、さらにおかしいのは、<我々は炉に燃える火や畠の野菜や素焼きの瓶や巖畳に出来た腰かけの中にも多少のマリアを感ずる>という文である。いったいマリアという存在は何を意味するのであるか。

[1] 平凡性のマリア

芥川のマリアにおける一番大きい疑問は、はたして芥川のマリアは人間であるか、人間でないかという点である。が、まず第一に、確かに言えることは、イエスキリストの母であるマリアは人間ではないという点であろう。というのは、マリアは<火>と<野菜>と<腰かけの中にも>感じられるからである。結局芥川は、マリアは生物とか無生物とかいう、いわゆる一つの存在者ではないと主張しているのである。要するに、マリアは存在論的な意味ではなく、その存在者を支配する一つの概念であると思う。それは、芥川が<～を感じる(感ずる)>という表現をしているところを見ても分かると思う。とすれば、その概念とは何か、が問題になるのは言うまでもなからう。

芥川は、マリアは<あらゆる女人>と<あらゆる男子>にも感じられるし、また <我々は炉に燃える火や畠の野菜や素焼きの瓶や巖畳に出来た腰かけの中にも多少のマリアを感ずるであらう>、と主張していた。このような芥川の言明は、マリアの属性を把握するには大事な文であるといえよう。

あらゆる男女と<火>と<野菜>と<腰かけ>などにマリアが感じられるというのは、結局マリアはどこにもある日常的なもの、すなわちありふれた存在だという意味なのである。言い換えれば、所謂<あらゆる日常の瑣事>(注17)であると言えよう。要するに、このような表現は

マリアの日常性の中の平凡さに対する芥川の暗示であるに違いないと思う。これは次のような文からも証明することができよう。

- ・クリストの父、大工のヨセフは実はマリア自身だった。(4 ヨセフ)
- ・クリストの母だったと云ふ以外に所謂ニウス・ヴァリユウのない女人である。

(続 11 或町のクリスト)

上の引用文のヨセフとは、主イエスの母マリアの夫を指している(マタイ 1 : 16、ルカ 3 : 23)。

聖書の中には、ヨセフのことについて詳しくは載っていない。ヨセフの職業は大工であり、従順な性格の正しい人であったと知られているだけである(マタイ 13 : 55、1 : 19~25、2 : 13~23)。その彼はイエスの伝道の開始後も、暫くは生きていたらしい(マタイ 13 : 55)。ところで、マルコ 6 : 3 ではイエスのことを“大工”とだけ言っているところから(注 18)、ヨセフの死後イエスが大工の仕事を引き継いだという説もある。

特にルナンは、このマルコ 6 : 3 の中の“マリアの子”という表現について、ヨセフが早く死んだためかと言っている(注 19)。しかし、このようなルナンの解釈は、必ずしも妥当な判断であるとは言えないと思う。と言うのも、ルカの福音書とヨハネの福音書の中には、“ヨセフの子”という表現が好んで使われているからである(ルカ 3 : 23、4 : 22、ヨハネ 1 : 45、6 : 42)。要するに、“マリアの子”とか“ヨセフの子”とかいう表現は、ただ福音書の記者たちの表記の仕方が違うだけであり、ヨセフの生死とは何の関わりもないと思う。

このようなヨセフについて、芥川が第 4 章<ヨセフ>において、<クリストの父、大工のヨセフは実はマリア自身だった>と表現したのは、ヨセフの死んだ後、マリアはヨセフの身代わりに家長の役割をした、という意味ではないの言うまでもなからう。結局芥川が、マリアはヨセフなのであると言い切っているのは、<文学的表現>(注 20)というよりは、やはりマリアの平凡性に対する暗示であると思う。これは同章の終わりの<ヨセフはどう最良目に見ても、畢竟余計ものの第一人だった>という文からも証明できる。つまり、芥川の目に映ったヨセフという人物は、天才のイエスの誕生において何の役割も果たせなかった無益な存在であったに違いない。言い換えれば、ヨセフはクリストの父ではない、クリストの実父は聖霊だと言いたがる芥川なのである。

マリアの平凡性を物語るもう一つの証明は、<続 11 或町のクリスト>のなかの<クリストの母だったと云ふ以外に所謂ニウス・ヴァリユウのない女人である>、という文である。ヨセフはクリストの父ではないとあって、ヨセフの平凡性と、ひいては無益な存在であることを浮き彫りにした芥川は、マリアについてはクリストの母性を認めていた。が、やはり天才のイエスの実母であるという事実以外は、注目に値するニュースとしての価値は皆無の女であると言い切っている。要するに、この文はマリアの平凡性に対する芥川の観念の現れであるに違いないと思う。

以上のようなマリアに対して芥川は、<マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である>と言っていた。このマリアについて、<「永遠に女性なるもの」ではない>と主張しているのは、前述したとおりに、男性とか女性とかいう性の問題ではなく、

あらゆる凡俗の男女のもっている普遍性・平凡性という概念を暗示するための芥川の表現であると思う。そのうえで芥川は、マリアは「永遠に守らんとするもの」である>とあってマリアの本質を規定しているが、これもやはり凡俗の人間たちが守ろうとして止まない日常的普遍性と平凡性を意味する芥川一流の表現であるに相違ないと思う（注 21）。

[2] <美しいマリア>の人生

次に言えるのは、それでもやはりマリアは人間であり、女性であるという点である。

芥川も、マリアがキリストの実母であることは認めているに違いないと思う。が、しかし芥川の目に映ったそのマリアは、苦難の現世に生きた普通の女性だったのである。マリアに対する芥川のそうした観念は、次のような文を見ても分かるだろうと思う。

- ・キリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通つてゐた。（2 マリア）
- ・マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。（続 11 或町のキリスト）

どうしてキリストの母マリアは、現世の<人間苦の途>（6 羊飼ひたち）を歩まねばならなかったのか。芥川はそのマリアの一生をキリストの誕生と関連づけて、次の如く述べている。

マリアの聖霊に感じて孕んだことは羊飼ひたちを騒がせるほど、醜聞だつたことは確かである。キリストの母、美しいマリアはこの時から人間苦の途に上り出した。

（6 羊飼ひたち）（下線論者）

芥川は聖霊によるマリアの妊娠について、<醜聞>という表現をしていた。これは、イエスの誕生は聖霊による処女降誕としている聖書（注 22）の奇跡を信じられない芥川にとっては（注 23）、当然の表現であつたかも知れない。

要するに、芥川はイエスを聖霊の子どころか、尻の軽い女の生んだ私生児に過ぎないと見做しているのである。それは<美しいマリア>という表現によって、彼女のスキヤンダルとそれに纏わる村の羊飼ひたちの騒動を浮き彫りにしている、芥川の皮肉を見ても推して知るべしであると思う。この<美しいマリア>とか羊飼ひたちの騒動などのことは、勿論聖書の中には出てこない、芥川の独自の表現なのである（注 24）。実際芥川は醜聞について、<公衆は醜聞を——殊に世間に名を知れた他人の醜聞を愛する>（注 25）と言っているが、これは後世の人々から救い主イエスの聖母として崇められたマリアを考えると、彼女に対する芥川の視角を把握する上で示唆に富む見解であると思う。

「西方の人」に強く影響を与えたといわれるルナンは、マリアの美しさについて触れたことはあるが、芥川の<美しいマリア>がそれに影響を受けたとは論者は思わない（注 26）。

この<美しいマリア>という芥川の表現は、後代の絵画に描かれている聖母の美しさからの影響と、地上的忍従に生きるマリアの生活態度に対する芥川自身の評価によるとあって、芥川のマリアをひいき目で見るとする説があるが、これはピント外れの見解であると思う（注 27）。また笹淵

友一の場合は、＜美しいマリア＞という表現を次の如く解釈していた。

さらに聖書とは直接関係ないが、彼はしばしばマリアを「美しいマリア」と呼ぶ。このイメージは言うまでもなくルネッサンス芸術による気高い、貴族的気品にあふれたマリアのイメージを根拠とするもので、彼のマリア概念と感覚的に調和しない。(注28)

笹淵の場合も、芥川の＜美しいマリア＞という表現は、＜ルネッサンス芸術による＞と語っている。しかし、後代の芸術に描写されている‘美しいマリア’は、深い信仰心の発露による宗教画なのである。芥川が＜基督教的信仰には徹頭徹尾冷淡だった＞(注29)人物であることは、周知の事実である。その彼が信仰心の目でマリアを見たはずがないと思う。実際、笹淵自らも芥川の＜美しいマリア＞は、＜聖書とは直接関係なく、＜彼のマリア概念と感覚的に調和しない＞と述べている。

という、聖書にもなく、マリア概念とも合わない表現を使っている芥川の意図は何か、が問題になるのは言うまでもなからう。以下、それについて考えてみたい。

私生児を産んだ＜美しいマリア＞の人生に対する芥川の観念は、次のような文の中にもありありと現れていると思う。

――(前 略)―― 美しいマリアはキリストの聖霊の子供であることを承知してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。マリアはキリストの言葉の為にヨセフに恥じなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に――或は人気のない夜中に突然彼女を驚かした精霊(聖霊の誤記であろう。一論者注)の姿も思ひ出したかもしれない。――(中 略)――しかし大工の妻だったマリアはこの時も薄暗い「涙の谷」に向かひ合はなければならなかつたであらう。(続8 或時のマリア)(下線引用者)

上の引用文には、“私生児”と＜美しいマリア＞と＜「涙の谷」＞という三つの問題点の相関関係がよく現れていると言えよう。

ところで、上記文に関連する聖書中の物語は、新約聖書のルカの福音書(2:41~52)に載っている。ルカの福音書のこの都上りの物語は、四福音書の中でイエスの少年時代のことに触れている唯一の記事である。この物語の神学的なポイントは、少年イエスが生徒として討論していたときのメシヤ的知恵と、母に答えた断固たる宣言、つまり神の子自覚の証言にあるといえる。一言で言えば、この物語の核心はイエスにあるのである。

しかし、芥川の話はこのような神学の意味を外れて、その中心はマリアのほうに据えられている。つまり、芥川は私生児を産んだ醜聞の張本人マリアに焦点を合わせているのである。マリアは十二歳のイエスのませた口答えにショックを受けて、夫の＜ヨセフに恥じなければならなかつた＞と同時に、＜彼女自身の過去も考へ＞ながら夜中に突然彼女を驚かした聖霊の姿も思ひ出したのである。この＜彼女自身の過去＞とは、言うまでもなく婚約者のある女の不倫のことを

指すと思う。

という訳で、このようなマリアを<美しいマリア>と描写したのは、やはり芥川の皮肉であるといえる。要するに、これは不道德な女への芥川の観念と認識の現れであるに相違ないと思う。不道德な行為とその女に対する芥川のシニカルな視角は、ほかの作品の中にも見ることができる。

美的ヒューマンイズムによって構築された「地獄変」（初出「大阪毎日新聞」；大7・5・1～22、『傀儡師』；新潮社、大8・1所収）の世界（注30）には、芥川独自の人生観と芸術観が現れているといえる。この作品に登場する良秀の娘は、絵師良秀と権力者大殿との葛藤と対立の渦に巻き込まれて焼死する犠牲者である。大殿に寵愛される彼女は、ある夜大殿かと思われる者との間で愛の揉め事を起こすが、その時の彼女は<月明かりの中にある美しい娘の姿>で、<何時もの幼さとは打つて変つた艶しささへも添へてを>った女性であった。

また、現在でも絶えず問題視される「藪の中」（初出「新潮」；大11・1、『春服』；春陽堂、大12・5所収）は、<近代的個人における、相対化されそれゆえに多様化されてしまった人生のあり方を、そのまま表現した作品>（注31）で、不可解な人間心理に対する芥川の人生認識が現れていると言える。この作品の事件の発端者である妻真砂は、夫の目前で強盗に強姦される。その後妻は強盗に魅きつけられるが、その時夫の目に映った妻は<まだあの時程、美しい妻は見た事がない>様子であった。

さらに芥川自身の生涯を象徴的に語っていて、彼の自叙伝の意味をもっている「或阿呆の一生」（昭和2・10、『改造』に発表）の中でも、芥川は不道德な関係の女の描写に<美人>という言葉を用いていたが、やはりこれも示唆に富む表現であるといえよう（注32）。

それから、マリアとは直接の関係はないが、芥川はサロメ（Salome）という女も“美しい”と表現していた。

ヨハネの首を皿にのせたものは残酷にも美しいサロメである。

（34 クリストの友だち）（下線引用者）

サロメとは、バプテスマのヨハネの首を所望した女のことで、ヘロデヤの娘である。このヘロデヤという女は、ヘロデ・アンテパス（ヘロデ大王の子で、イエスに狐と呼ばれた。→ルカ13：32）の異母兄ヘロデ・ピリポの妻であったが、夫を捨て、娘サロメを伴い、アンテパスと結婚した。ヨハネはこの近親相姦の罪の故に、アンテパスを非難したので、ヘロデヤはヨハネに恨みを抱いていたのである。折よく、サロメはヘロデの誕生日の宴で踊りを披露したが、彼女は母ヘロデヤのそそのかしに従ってヨハネの首を要求した、と伝えられる（マタイ14：1～11、マルコ6：14～29）。ただし、聖書の本文にはサロメの名は現れない。さらに、そのサロメを美しい女とは記していなかった。ところが芥川は、このような残酷で不道德な女を美しいと表現していたのである。

要するに、以上のような作品の例は、美しい女性の裏面にある不道德と不倫性を見て取る芥川の女性観の現れであるに相違ないと思う。

結局、不道德な女に対する芥川のこのような認識は、イエスの母マリアにも繋がるのである。

つまり、十二歳のイエスの口答えに自らの過去の不倫を顧みて、夫のヨセフに対して恥じる艶美なマリアのことは、やはり芥川の女性観の現れだった所以である。そのようなマリアを、芥川は〈美しいマリア〉と表現して当てこすっていたのである。

[3]「涙の谷」を歩むマリア

スキヤンダルに絡んでいるマリアについて芥川は、彼女の一生は〈「涙の谷」の中に通つてみた〉と描写しているが、これには人生に対する芥川の観念が投影されているに違いないと思う。注釈のほうで考察した通りに、この〈「涙の谷」〉という言葉は特定の地名ではなく、荒廃と嘆きのある場所を表している。つまり言い換えれば、苦難の道という意味なのである。結局芥川は、マリアは一生荊の道を歩んだのであり、彼女の人生は苦難の中にあつたと主張しているのである。

芥川のマリアは過去の不倫によって私生児イエスを生んだ、というのは先に述べた通りである。マリアはその時から苦難の道を歩いて行ったというのも、芥川の視角であつた。マリアの人生に対する次のごとき表現には、芥川の人生への暗い観念がよく現れているといえよう。

- ・クリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通つてみた。(2 マリア)
 - ・クリストの母、美しいマリアはこの時から人間苦の途に上り出した。(6 羊飼ひたち)
 - ・大工の妻だつたマリアはこの時も薄暗い「涙の谷」に向かひ合はなければならなかつたであらう。(続8 或時のマリア)
 - ・マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。(続 11 或町のクリスト)
- (下線引用者)

マリアにおける人生はマイナス的で暗いものであつたが、それはそのまま芥川の観念の中の人生でもあつたと思う。というと、芥川における人生はどういうものであるか。

逆説も皮肉も知性の産物というならば、理知による表現を重要視した作家芥川の「侏儒の言葉」は、世間の事柄を冷静な理知の目で捉えたアフォリズム集であるといえる。

つまり、「侏儒の言葉」は卓抜した才知で、人生・文化・社会を捉えた短文の小説ノオトともいえるもので、したがってここには芥川の得たさまざまなく人生の体験〉が表されているのである(注33)。

この作品の中で芥川は、〈人生は常に複雑であ〉(暴力)り、〈人生は地獄よりも地獄的である〉(地獄)といて、人生に対する彼の暗い観念を述べていた。その上、特に注目すべき表現は、次のような文であろう。

女人は我々男子には正に人生そのものである。即ち諸悪の根源である。(女人)

上の引用文は、芥川における人生と女の関係をよく物語ると思う。つまり、“女は人生なり。人生は諸悪なり。然らば女は悪の塊なり。”という意味に取れるといえよう。要するに、上の引用文には芥川の凝縮した人生観と女性観が、よく現れていると思う。

結局、人生と女の相関関係に関する芥川のこのような観念は、そのまま“美しいマリア”という女の人生に投影されたと思うのである。

V 主な語句の注釈

[1] 「永遠に女性なるもの」ではないマリア

マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。
(下線引用者)

芥川がマリアに対して使っている「永遠に女性なるもの」という表現は、ゲーテの「ファウスト」に出てくる言葉である。

このゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe : 1749～1832 年) への芥川の興味は、既に学生時代から芽生えたといえる。つまり、芥川は 1919 年 (大正 8) 7 月 31 日、小説家にして雑誌編集者である佐佐木茂索宛の書簡で、「僕一時 (二十三才前後) 精神的に革命を受け 始めてゲエテの如きトルストイの如き巨匠を正眼に見得たりと信ぜし時あり」 (注 34) と述べているように、ゲーテへの彼の関心は作家活動の初期から始まったことを明らかにしている。

ゲーテの代表作で劇詩である「ファウスト」(Faust) は、ルネサンス期に生きたとされるファウストという伝説的人物に基づく二部作である。物質的快楽のために自分の靈魂を悪魔に売り渡したというファウスト伝説は、ゲーテにおいて高められ、人間に与えられた一切の幸福と苦痛とを自ら体験し、自我を普遍的なものに高めようとする衝動が基調となる。1774 年～1831 年に書かれたこの作品は、著者ゲーテの全思想と体験を盛った畢生の大作で、知識と行動への限らない意欲を持つファウストが世界を遍歴する物語である。

芥川はこの大作を、当時の日本の文壇においてゲーテ通といわれていた森鷗外訳で読んでいた。やはり佐佐木茂索宛の同じ書簡で芥川は、「君の書中ゲエテに及ぶの語あり 僕私に君の為に喜ぶ 君既にゲエテの大を看取せば (但月並の看取にあらず) 更に猪突の勇を鼓して彼の奥所に味到せよ 一巻のファウストよく君の為に神の如き彼を彷彿せしめん」 (注 35) と記して、「ファウスト」の価値を認めていた。

ところで、この劇詩「ファウスト」の第二部第五幕の最終場面に、「永遠に女性なるもの / 我等を引きて往かしむ」というところがある。これは、永遠不変の女性の美しさ、やさしさなど、純粋な女性そのものの意であるという (注 36)。要するに、女性の肯定的な面としての美しさを歌っているのである。

しかし芥川は、「マリアは「永遠に女性なるもの」ではない」とあって、伝統的な美しいマリア像を否定している。

前に述べたとおりに、新約聖書中でも同じマリアという名をもつ人物はマグダラのマリア以下何人もいるが、一般にマリアといえばイエスキリストの母、いわゆる聖母マリアを指す。このマリアは、“神の母”としてのイメージが時代の進展とともにしだいに重要視されるに従って、マリ

アに関する民間説話もその数を増し、中世盛期には「黄金伝説」の中に聖母伝が編入されて民間に流布した。さらにマリアは聖人たちの筆頭として、キリスト教ではほとんどいつの時代にも多くの信仰を集めたが、特にカトリック教会ではマリアの永遠の処女性、無原罪、昇天などについての教義によって、ほとんどキリストと並ぶ信仰と崇敬の対象となった。

結局、本文の「マリアは「永遠に女性なるもの」ではない」という芥川の主張を見ると、芥川はこのような伝統的・神学的なマリア観を拒否し、このマリアに彼一流の女性像を投影していたのである。

芥川は評論「文芸的な、あまりに文芸的な」の第二十一章において、ダンテにおけるベアトリーチェ (Beatrice) (「神曲」のベアトリーチェのモデル) と、ゲーテにおけるフリーデリケ (Friederike) (「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」のマリーアのモデル) とを、彼ら二人の作家における「永遠に女性なるもの」の好例としてあげている (注 37)。

しかし芥川はその後に、二人の作家にとって“永遠の女性”であった彼女たちも、やはりその裏面の真相を知ることができれば、失望を招くに決まっていると付け加えていた。

ベアトリーチェは正宗氏の言ふやうに女人よりもはるかに天人に近い。若しダンテを読んだ後、目のあたりにベアトリーチェに會つたとしたならば、僕等は必ず失望するであらう。

僕はこの文章を書いてゐるうちにふとゲーテのことを思ひ出した。ゲーテの描いたフリーデリケは殆ど可憐そのものである。が、ボンの大學教授ネエケはフリーデリケの必しもさう云ふ女人でないことを發表した。(注 38)

上の引用文から分かるように、芥川は「晩年に至つても、所謂「永遠の女性」を夢みてゐた」(「文芸的な、あまりに文芸的な」) ダンテのベアトリーチェのみならず、「永遠に女性なるもの」を崇拜したゲーテ (「侏儒の言葉」) のフリーデリケの場合も、彼らの「永遠に女性なるもの」の実相は虚妄であることを明らかにしていた。結局、「永遠に女性なるもの」に対する芥川のこのような観念は、マリアの上に投影されていったといえる。

という訳で、芥川はマリアの持っている「永遠に女性なるもの」のイメージを認めないのである。

[2] 「涙の谷」の位置

クリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通つてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行つた。(下線引用者)

上の引用文の「涙の谷」という表現は、旧約聖書の詩篇第 84 篇 6 に出てくる言葉である。詩篇は聖書中、最も愛読されている書である。それは、神の民のありのままの姿を、人生の喜び、悲しみ、恐れ、失望、迷いなど、様々の経験を赤裸々に描いているからである。つまりこの詩篇は、人間として経験できる人生のすべての問題を、幅広く實際的に扱っている人間の書物なので

ある。結局、この詩篇に載っている「涙の谷」の問題も、そのような人生の次元のうえにおいて解釈すべきであると思う。

時代が変わっても、人間の直面する問題は基本的に変わらないものである。今日の近代人の諸問題は、詩篇のなかに見られる約二千五百年もの前の旧約時代の人々によってすでに経験されたことなのである。という訳で、この詩篇は真剣に人生を歩もうとする人にとっては必読の書であるといえる。

近代人芥川が、新約聖書の共観福音書の外に、旧約聖書のなかではこの詩篇をよく読んだということは、詩篇の持っている内容と性格を考えると、示唆に富むといえよう。

前に触れたとおり、芥川がマリアの一生のたとえとして使った「涙の谷」は、詩篇第 84 篇 6 にしか出てこない言葉である。

巡礼者の喜びの歌である詩篇第 84 篇 1～12 の中で、特に「涙の谷」の言葉が入っている歌 6 は、神殿への道を歩いていく巡礼者が、苦境を乗り越えて進む姿を象徴的に描いたものである。

彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。
初めの雨もまたそこを祝福でおおいます。(下線引用者)

引用の詩篇第 84 篇 6 の「涙の谷」という表現は、特定の地名でなく、荒廃と嘆きのある場所を表す。つまり、一言でいえば苦難の道という象徴的な意味なのである。

芥川は、「クリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通つてみた」と主張していたというのは、先に触れたとおりである。という、聖書の中に現れている「涙の谷」の象徴的な意味を理解することができれば、芥川のこの主張は結局、クリストの母、マリアは苦難の中にその一生を過ごした、という意味であることが分かるだろうと思う。これはすぐ後の、「が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行つた」という文をもつても証明できるのである。

要するに、芥川は聖書に出てくる「涙の谷」のマイナ斯的なイメージとしての象徴的な意味を、正確に知り尽くしていたのである。

[3] マリアに対するニーチェの反逆

芥川のニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche : 1844～1900 年) への理解は、早くから始まったと言える。

それは或本屋の二階だつた。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新しい本を探してゐた。―― (中 略) ―― そのうちに日の暮れは迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を読みつづけた。そこに並んでゐるのは本と云ふよりも寧ろ世紀末それ自身だつた。ニイチエ、ヴェルレエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベール、……彼は薄暗がりと戦ひながら、彼等の名前を数へて行つた。―― (後 略) ―― (下線引用者)

上の引用文は、「或阿呆の一生」（昭和2年10月、『改造』）の冒頭〈一 時代〉の一部分である。全五十一の断章から成るこの作品は、死を覚悟して生涯を顧みたもので、死に臨んでの告白的な手記である。という訳で、事実のいかんを越えて、作家芥川のすべてを知るに役立つ作品といえる。この作品の中で、芥川は二十歳のころ、丸善書店の二階にある洋書コーナーへ行って、新しい洋書をしきりに探す、彼がそこで発見したものを〈世紀末それ自身だつた〉と書きつけ、早からのニーチェの影響をうかがわせたのである。

芥川がニーチェに言及している部分の作品は、「路上」「河童」「闇中間答」「樗牛の事」「僻見」「文芸的な、余りに文芸的な」「西方の人」「支那遊記」「大導寺信輔の半生」「Lies in Scarletの言」などであり、その中でも内容的にかかわりがあるのは、「河童」「闇中間答」「文芸的な、余りに文芸的な」「西方の人」「大導寺信輔の半生」だけである（注39）。

本稿で論じている「西方の人」のなかには〈2 マリア〉、〈31 クリストよりもバラバを〉、〈37 東方の人〉の章にニーチェのことが登場している。

世間智と愚と美德とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。ニーチェの叛逆はクリストに対するよりもマリアに対する叛逆だつた。（2 マリア）

クリストに対するニーチェの反逆とは、ニーチェによるクリスト教への批判のことを意味する。クリスト教に対するニーチェの激しい攻撃は、“神は死んだ”という彼の主張にその絶頂を見るところ。

ニーチェは「たのしい知識」（1883年）の断章第125番で、はじめて神の死に触れた。ひとりの狂人が、〈神はどこへ行ったのか。私がそれを教えてやろう。われわれが神を殺したのだ！ おまえたちとわたしとが！……神は死んだ。死んだままだ！そして神を殺したのはわれわれだ！〉（手塚富雄訳）と言うのである。神の死はさらに「ツァラトストラはかく語りき」でも、〈いっただいこれはありうべきことだろうか。この老いた超俗の人が森にいて、まだあのことをなにも聞いていないとは。神は死んだ、ということ。〉という形で繰り返し語られていたのである。かつて全世界が信じていた神が、もはや生きていないということは、結局クリスト教の破滅を意味するほど、ニーチェはクリスト教に批判的態度を取ったのである。

また、「反クリスト」（1895年）のなかにおいて、クリスト教を激しく批判したニーチェは、クリスト教も含めたすべての信仰を〈脱自己・自己疎外の表現〉（54）とし、クリスト教的世界観への〈反逆〉を示したのである。

——これで結論に至り、私は私の判断を述べる。私はクリスト教に有罪の判決を下す。私はかつて弾劾者の言った弾劾の中でも一番激しい弾劾をクリスト教会にするのである。私の見たところでは、クリスト教会は有らん限りの腐敗物の中でも最も腐敗したものである。——（中略）—— 私は壁という壁に、壁といえるものはどれにでも、クリスト教に対するこの永遠な弾劾を書きたい。——私は盲人でも見ることのできる文字を持っている。……私はクリスト教を一つの大きい呪詛（Fluch）と呼んでいる。また、一番大きい内面的な

一つの腐敗 (Verdorbenheit) といっている。―― (中 略) ――――私はそれを一つの永遠なる人類の汚点と呼んでいる。…… (韓国語訳から)

この「反キリスト」の結びの言葉を、彼に近づいてくる狂気の徴候と見なしても、ニーチェの非道徳主義は、最後までキリスト教的思想と極端に対立していたのである。

ドイツのザクセンの牧師の子として生まれ、大学で神学を学んだこともあるニーチェであればこそ、キリスト教に対するこのような彼の激しい批判の言説は、芥川の目にはキリストに対する<反逆>に見えたと思う。

ところで芥川は、ニーチェのこの反逆はキリストよりも<マリアに対する叛逆だつた>と主張していた。勿論、ニーチェはキリスト教を攻撃したので、広く解釈すればこれを<マリアに対する叛逆だつた>、という意味に取れないこともなからう。しかし、ニーチェは直接マリアを取り上げて批判してはいないのである。という、結局これは芥川一流の表現になると思われるが、芥川のこのような主張は、いったい何を意味するのか。

ニーチェは「ツァラトゥストラはかく語りき」において、キリスト教的善悪を弱者の奴隷道徳といてそれを否定し、強者の自律的道徳、すなわち君主道徳を主張し、この道徳の具現者を“超人”と呼び、これを生の根源にある権力意志と見る“超人の道徳”を説いた。全体で四部からなっているこの作品の内容は、キリスト教的な美德が持つ欺瞞性の暴露など、やはりキリスト教批判で一貫しており、神の死以後、ニヒリスティックな様相を露呈してきている世界と人間の意味が根源的に問われている。

特にニーチェがその理想を力説した“超人”とは、キリスト教的善悪を否定し、民衆の支配者として、人間的な可能性を極限まで実現した理想的な人間を意味する。

結局彼の超人思想は、凡俗を越えた自由なる権力意志の体現者のことであり、また人類がすべてそのような天才となる理想郷のことでもあったのである (注 40)。

という、<ニーチェの反逆はキリストに対するよりもマリアに対する叛逆だつた>、という芥川の主張の理由はもう明らかになったと思う。

既に調べたとおりに、<ニーチェの反逆はキリストに対する>ことであつたとは、キリスト教に対するニーチェの挑戦と攻撃のことを意味していた。が、しかし芥川は、そのニーチェの反逆は実は<マリアに対する叛逆だつた>と言っている。それは換言すれば、ニーチェはマリアを批判・攻撃したという意味なのである。

芥川におけるマリアは、日ごとの日常を平凡に生きる凡俗な人間を象徴するというのは、前に述べたとおりである。つまり、マリアは日常的平凡性の意味だつたのである。とすれば、このマリアは、先述したニーチェ哲学においての超人思想の論理から見れば、“超人”の対極に位置する、いわゆる善悪の彼岸にあるカリカチュアとしての“末人”のような存在であるに相違ないと思う。そのマリアに対する芥川の位置付けは、次の如き文からも証明できよう。

世間智と愚と美德とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。

要するに、＜世間智と愚と美德と＞が共存するマリアとは、凡俗な生活者である“末人”そのものなのである。とすると、そのようなマリアは批判・攻撃すべきであろう。

という訳で、＜ニイチエの叛逆＞という論理は、実は平凡な“末人”の＜マリアに対する叛逆＞のそれだったといえるのである。

VI 結 語

芥川龍之介の作品「西方の人」は、イエスの誕生から始まって、宣教活動、十字架の死、それから復活へとつながるイエスの一生について、彼一流の感想をイエスの年代記風に記したものである。という訳で、当然芥川は、まずイエスの誕生の際の父母に関して自分なりの感想文を最初のほうに載せているが、本稿においては、まず第一に、イエスの母マリアについて考察することを目的とした。

最初に、聖書の中のマリアについて調べてみたが、このマリアは神への信仰心と自分の子への母性をもっている平凡な女人であった。つまり、神の子の処女降誕という神からの使命を信仰で受け入れたマリアであったが、それと同時にイエスの宣教活動を誤解して、イエスを連れ戻しに来る母親としてのマリアでもあった。このような母と子としての人間的関係は、結局世の中の平凡な母の姿であるといえる。

「西方の人」のマリアに対する先行研究は、聖霊とマリアとの対立構造のなかで展開されていたのが一般的であった。＜二極構造＞、＜対局＞、＜対照的＞、＜両者の葛藤＞というふうに論じているのがその例である。表現の用語は違っているものの、マリアのことを聖霊との対立のうえで、論じているという面においては大差はないといえる。もちろんこれは、マリアと聖霊のことをく永遠に守らんとするもの＞とく永遠に超えんとするもの＞とに、対立的に述べていた芥川一流の表現に影響されたに違いないと思う。

しかし一方、このような対立構造を認めないものには、聖霊とマリアに対比される＜二元論＞を否定し、芥川家の宿命と近代との関連のうえでマリアのことを論じている研究もあれば、本来は＜一元的なもの＞であるといつて、芥川一流の表現を認めない論もあった。

その他、＜炉辺の幸福の守護神＞とか＜大衆＞、または＜保守主義者＞などのように、マリアの象徴性について述べている論もあった。

しかし今までの先行研究は、聖霊とマリアに対する芥川一流の性格描写にこだわり過ぎていたといえる。当然、だいたい先行研究は芥川の作った表現を踏まえたうえで、論を展開していた。それは一見正しい論説のようであるが、芥川流の表現で言ってみれば、芥川の弄した表現に＜捉はれる危険を持つてゐる＞のも事実である。

という訳で、芥川一流の表現に＜捉はれないやうに警戒してゐる＞ながら、もっと自由に思考の翼を広げて、マリアの意味することを究める必要があると思う。

その考察の結果、芥川のマリアは凡俗性・平凡性の象徴であったことが分かった。そのようなマリアの属性を、イエスの義父ヨセフと＜ニウス・ヴァリユウのない女人である＞マリアへの性

格描写に見ることができた。つまり「西方の人」のマリアは、あらゆる男女と日常的なものに感じられる一つの概念としての平凡性を意味していたのである。

芥川のマリアに対するもう一つの属性は、＜美しいマリア＞という表現の上にも現れていた。芥川は聖霊によるマリアの妊娠を、聖書にもない＜醜聞＞という言葉で表現していた。このような芥川の表現は、イエスを聖霊の子どころか、尻の軽いく美しいマリアの生んだ私生児に過ぎないと見做している彼一流の皮肉であることが分かった。という訳で、芥川はマリアを、純粋な女性の意で永遠不変の女性の美しさを意味する＜「永遠に女性なるもの」＞とは呼ぶことができなかったのである。

要するに、このような艶美なマリアを＜美しいマリア＞と描写したのは、不道德な女に対する芥川のシニカルな視角と観念の現れであった。さらにこのようなマリア観は、芥川の女性観としての作品にも見ることができた。

過去の不倫によって私生児を産んだ芥川のマリアは、結局一生の間、＜「涙の谷」＞を歩むようになった。荒廃と嘆きのある場所として、人生における苦難の道を意味する＜「涙の谷」＞は、＜美しいマリア＞の人生の道の上に現れていたのも見ることができた。つまり、このマリアの人生は苦難の中にその一生を送ったという意味なのである。

結局これは、芥川の観念の中の人生でもあったのである。＜人生は地獄よりも地獄的である＞という芥川にとって、その人生は＜女人＞そのものであった。さらに注目すべきことは、その＜女人＞は＜諸悪の根源である＞という表現であった。我々はこのような芥川の表現の上に、＜人生＞と＜諸悪の地獄＞と＜女人＞とが鼎立していることと、その相関関係を見ることができるのである。

要するに、芥川の凝縮した人生観と女性観がよく現れているのは、これらの関係においてであったと思う。結局、人生と女の相関関係に関する芥川のこのような観念は、＜美しいマリア＞という艶美な女の人生にそのまま投影されたといえよう。

以上見てきたとおりに、「西方の人」のなかの＜マリア＞は、日常の平凡性を守ろうとする凡俗な人間、すなわちニーチェの超人哲学の“末人”のような存在であった。さらにこの平凡性の他に、芥川は凡俗なマリアという女の人生に、彼一流の女性観と人生観を披瀝していたことが分かった。

《 注 》

(注1) 「旧約新約聖書大事典」(東京、教文館、1995)、1131頁。参照

(注2) 廣瀬哲士訳、「ルナン耶蘇」(東京、東京堂、1935)、111頁。

(注3) 吉田孝次郎 他、「芥川龍之介『西方の人』全注解」(東京、清水弘文堂、1982)、6～13頁。参照

(注4) 吉田精一注、日本近代文学大系38「芥川龍之介集」(東京、角川書店、1970)、44～45頁。

- (注5) 梶木 剛、「——芥川における知識人と大衆—『西方の人』をめぐって——」、
「國文學」昭和45年11月号(東京、學燈社、1970)、55頁。参照、
- (注6) 高田瑞穂、「芥川龍之介論考」(東京、有精堂、1976)、203頁。
- (注7) 鈴木秀子、「芥川龍之介とキリスト教—「西方の人」を中心として—」
日本文学研究資料叢書「芥川龍之介」(東京、有精堂、1988)、125頁と132頁。参照
- (注8) 石割 透、「『西方の人』『続西方の人』をめぐって」「一冊の講座 芥川龍之介」
(東京、有精堂、1982)、137～146頁。参照
- (注9) 笹淵友一、「芥川龍之介『西方の人』新論—とくに比較文学的に—」
日本文学研究資料新集「20 芥川龍之介・作家とその時代」(東京、有精堂、1987)、
185頁。参照
- (注10) 海老井英次、「鑑賞日本現代文学 11 芥川龍之介」(東京、角川書店、1981)、
306～311頁。参照
- (注11) 佐藤泰正、「テキスト評釈『西方の人』『續西方の人』一校訂・語釈・論評—」
日本文学研究資料新集「20 芥川龍之介・作家とその時代」、196頁。参照
- (注12) 関口安義、「芥川龍之介 実像と虚像」(東京、洋々社、1988)、229～231頁。
- (注13) 笹淵友一、「『西方の人』論」、海老井英次 他(編)「作品論 芥川龍之介」
(東京、双文社出版、1990)、371～376頁。参照
- (注14) 宮坂 覺、「芥川龍之介と二人の<英雄>—『義仲論』と『西方の人』を中心として—」
日本文学研究資料新集「19 芥川龍之介・理知と抒情」(東京、有精堂、1993)
141～151頁。参照
- (注15) 三好行雄、「一宿命としての母—」三好行雄著作集第三卷「芥川龍之介論」
(東京、筑摩書房、1993)、321頁。
- (注16) 「—<対談> “日本のクリスト” とは何か—」日本文学研究資料新集「19 芥川龍之介・
理智と抒情」、234頁。参照
- (注17) 吉田精一注、「侏儒の言葉」日本近代文学大系 38「芥川龍之介集」、289頁。
- (注18) 「この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟
ではありませんか。その妹たちも、私たちここに住んでいるではありませんか。こう
して彼らはイエスにつまずいた。」(マルコ6:3)(下線引用者)
- (注19) 「ヨセフは、彼の子が公の仕事をするやうになる以前に死んだのである。従つて、
後の残つたマリヤが家長となつた。このことは、イエスを多くの他の同名人と區別しよ
うとする時、屢『マリヤの子』と呼んだ理由を説明するものである。良人の死によつて、
ナザレと縁の無くなつたマリヤは、生れ故郷であつたからと見えて、カナに引つ込んだ
ものらしい。」(廣瀬哲士訳、「ルナン耶蘇」、58頁。)
- ◆イエスの家族についての情報は乏しい。彼の父は手職人ヨセフである(マタイ13:55～56)
が、既に早く死んだものと思われる。母はマリヤという。イエスは4人の弟と2、3人の
妹と共に育つた(マルコ6:3、3:31、21)。→「旧約新約聖書大事典」、105頁。
- (注20) 吉田孝次郎 他、「芥川龍之介『西方の人』全注解」、14頁。参照

- (注 21) →<このマリアを芥川は「永遠に守らんとするもの」と呼び地上の生活を意味させている。>→上掲書、7頁。参照
- (注 22) 「聖書」新改訳、マタイ 1 : 16、参照
- (注 23) 吉田精一注、日本近代文学大系 38「芥川龍之介集」、「齒車」、228頁。
- (注 24) 「聖書」新改訳、マタイ 2 : 3、ルカ 2 : 8~20、参照
- (注 25) 吉田精一注、「侏儒の言葉」、日本近代文学大系 38「芥川龍之介集」、284頁。
- (注 26) <しかしながら、夕方其處に集る婦人の美しさ、既に六世紀に記され、娘マリヤの天資を認められるといつた、その美しさは著しく残つてゐる。> (廣瀬哲士訳、「ルナン耶蘇」、22頁。参照)
- (注 27) 吉田孝次郎 他、「芥川龍之介『西方の人』全注解」、54頁。参照
- (注 28) 菊地弘 他 (編)、「芥川龍之介事典」(東京、明治書院、1985)、207頁。
- (注 29) →「ある鞭」
- (注 30) 三好行雄 (編)、「芥川龍之介必携」(東京、學燈社、1979)、95頁。参照
- (注 31) 海老井英次、鑑賞日本現代文学 11「芥川龍之介」、230頁。
- (注 32) →「或阿呆の一生」27 (スパルタ式訓練)
- (注 33) 三好行雄 (編)、「芥川龍之介必携」、43頁。
- (注 34) 芥川龍之介、「芥川龍之介全集」18 (東京、岩波書店、1997)、307頁。
- (注 35) 上掲書、308頁。
- (注 36) 吉田孝次郎 他、「芥川龍之介『西方の人』全注解」、7頁。参照
- (注 37) 吉田精一注、日本近代文学大系 38「芥川龍之介集」、「文芸的な、あまりに文芸的な」、368頁。参照
- (注 38) 上掲書、368頁。
- (注 39) 「現代思想」臨時増刊号 (東京、青土社、1995)、134頁。参照
- (注 40) 菊地弘 他 (編)、「芥川龍之介事典」、342頁。参照

《参考文献》

1. 吉田孝次郎 他、「芥川龍之介『西方の人』全注解」、東京、清水弘文堂、1982
2. 吉田精一 (注釈)、日本近代文学大系 38「芥川龍之介集」、東京、角川書店、1970
3. 芥川龍之介、「芥川龍之介全集」18、東京、岩波書店、1997
4. 「聖書」(新改訳)、東京、いのちのことば社、1982
5. 廣瀬哲士訳、「ルナン耶蘇」、東京、東京堂、1935
6. 三好行雄 (編)、「芥川龍之介必携」、東京、學燈社、1979
7. 「國文學」昭和 45 年 11 月号、東京、學燈社、1970
8. 「國文學」昭和 63 年 5 月号、東京、學燈社、1988
9. 高田瑞穂、「芥川龍之介論考」、東京、有精堂、1976

- 10。海老井英次、鑑賞日本現代文学 11「芥川龍之介」、東京、角川書店、1981
- 11。日本文学研究資料叢書「芥川龍之介」、東京、有精堂、1988
- 12。日本文学研究資料新集「19 芥川龍之介・理知と抒情」、東京、有精堂、1993
- 13。日本文学研究資料新集「20 芥川龍之介・作家とその時代」、東京、有精堂、1987
- 14。「一冊の講座 芥川龍之介」、東京、有精堂、1982
- 15。関口安義、「芥川龍之介 実像と虚像」、東京、洋々社、1988
- 16。海老井英次 他(編)、「作品論 芥川龍之介」、東京、双文社出版、1990
- 17。三好行雄、三好行雄著作集第三卷「芥川龍之介論」、東京、筑摩書房、1993
- 18。「現代思想」臨時増刊号、東京、青土社、1995
- 19。菊地弘 他(編)、「芥川龍之介事典」、東京、明治書院、1985
- 20。「旧約新約聖書大事典」、東京、教文館、1995